

石に魂をこめる —石屋忠兵衛—

湯浅町深専寺の門前に、たたみ一畳ほどの大きさの石碑がある。

その石碑の文字を何とか読もうとがんばっているのは、地元の小学生グループである。どうやら地域学習で、この石碑のことを調べようとしているようである。

深専寺の住職は、その様子をしばらく見ていたが、小学生たちのあきらめかけた様子を見て声をかけた。

「石碑の文字は読めたかい。」

「読める字もありますが、よくわかりません。」

グループのリーダーらしい女の子が答えた。

「ほれ、これが題だよ。『大地震津なミ（津波）心え之記』とある。」

住職は区切って読みながら、子どもたちに石碑について説明することにした。

今から約百六十年前の一八五四年十一月四日、五日に大きな地震があった。五日の地震（安政南海地



深専寺門前の石碑

震）は大津波を引き起こし、和歌山の沿岸の町や村に大きな被害をもたらした。湯浅でも多くの家が流され、何十人も人の命がうばわれた。

当時の住職承空上人は、それより約百五十年前（一七〇七年）にも大地震と大津波があり、同じような被害があったことを知っていた。その時、浜辺に逃げ、津波にのまれて亡くなる人が多かったのに、今回も同じようにして亡くなる人がいた。また、昔から津波の前には井戸の水が減ったりにごつたりするといわれていたが、今回そんなことがなかった。まちがった言い伝えを信じてはいけないのである。上人は、大地震の後は、津波が押し寄せてくるものと考え、海や川に近づかず、深専寺の門前からまっすぐ東に向かい天神山に逃げるように町人に伝えたいと考えた。

しかし、口伝では、その教えは何年後かには消えてしまう。石に刻んで残したいと考え建てられたのがこの石碑である。

「こちらも見てください。」

と言って、住職は石碑の裏に回った。そこには五十人近い人の名前があった。

「この人たちは、承空上人に賛同し、石碑を建てるためにお金をご寄付された人たちだよ。この人たちの思いももっているんだよ。」

「そういえば、すごく深くきれいに字をほっているね。どんな人がほったのだろう。」

それを聞いた住職は、今度は石碑の側面を指さした。

「ここに世話人として二人の名前が大きく刻まれている。一人は、『宮原屋清兵衛』。この人は主に寄付を集めに駆け回った人だろう。もう一人は『石屋忠兵衛』。この人はこの石碑に字を刻んだ職人さんだよ。実は、この人にも特別な思いがあったんだよ……。」

深専寺の石碑が完成した年から六年さかのぼる。湯浅熊野街道筋にある忠兵衛の作業場は、集められた弟子の職人たちでうめつくされていた。忠兵衛は、年齢三十七歳ながら、その腕前は和歌山城下で知られるほどで、弟子も湯浅を中心に三十人近くいた。

何事かと待ち構える弟子たちに向かって、忠兵衛は口を開いた。頬が紅潮していつもより表情がかたい。「先ほど、ご城下の一位様の使者がいらっしゃった。和歌浦片男波に中国の西湖にあるような石の橋をつくりたいということだ。」

「聞いたことがあります。美しい曲線をもった石の橋ですね。」

「そうだ。めずらしい、石でできた反り橋だ。橋づくりは、肥後（現在の熊本県）の石工がつとめる。私には、五雲のほり物がたなびく欄干をつくってほしいとの仰せであった。今までやったことのない仕事だ……。ご城下の石工たちにも呼びかけたが、自信がないのか、だれも引き受ける者がいなかったらしい。失敗したら大変な責めを負うことになるかもしれない……。だが。」

と、忠兵衛は言葉を切った。

「私はやろうと思う。石屋忠兵衛の名にかけて日本一の橋にしたいと思う。みんなやってくれるか。」

「おう。」

と弟子たちは声をそろえた。

「親方、やろう。湯浅の、紀州の石職人の腕前を日本中に見せてやりましょう。」

肥後の石工が積み上げた石橋は、きれいな曲線をもって完成した。どうして石組みだけで橋がくずれないのか、忠兵衛たちにはわからなかった。

その技術は肥後の石工集団だけが知っている秘伝であった。

一方、忠兵衛がほった欄干の彫刻の美しさに、肥後の職人たちが息をのんだ。十四面の飾り石に見事な五雲がわき立っていた。うずをまいた雲、花びらのような雲、流れている雲、それぞれが次々生まれているようにも見える。橋は「不老橋」と名付けられた。

忠兵衛は満足していた。一位様からのおほめの言葉とほうびにいただいた脇差（刀）もうれしかったが、何よりそのできばえがわれながらうれしかった。弟子たちとともに、冬の寒い日も台風の日も歯を食いしばって仕事をしたかいたがあった。



不老橋の欄干

石屋忠兵衛の名声はますます高くなつた。

ところが、不老橋完成から三年後の一八五四年十一月、大変なことが起きた。二日間にわたる大地震と大津波である。

忠兵衛は、自分の作業場や住居の片付けもそこそこに、不老橋に駆けつけた。欄干の大部分が割れたり、海にくずれ落ちたりしていた。土台となる反り橋の石積みもいくらか欠けている。

(大変なことになった。しかし、ここであきらめたら、紀州の石職人の名折れだ。)

橋の復旧は、製作者である忠兵衛たちの責任のもとで行われた。お城から修理費用が充分出るわけではない。忠兵衛は、私財を投じながら橋の修理作業を始めた。

こわれた欄干は、手すり、五雲の彫刻石、土台部分と別々につくり、三段に重ねていたが、今回は一つの石からつくり出し、つぎめのない構造にした。この方が、地震や津波に強いからだ。

忠兵衛の借金はふくらんだ。無給で働く弟子たちに申し訳ないと思った。

そして、あらためて人間の力をこえた自然のおそろしさを知った。

深専寺の石碑が完成したのは、不老橋の二度目の完成から一年後のことであった。

※注1 一位様・・・紀州の第十代藩主徳川治宝のこと。この時治宝は藩主を退き隠居の身であったが、藩では一番の実力者であった。「従一位」という位階（朝廷からいただく位）にあったことから「一位様」と呼ばれていた。

※注2 石工・・・「いしく」ともいう。

※注3 五雲・・・仙人や天女が遊ぶところにかかるという五色の雲。

※注4 欄干・・・橋・階段などの縁に、人が落ちるのを防ぎ、また装飾ともするために柵状につくりつけたもの。てすり。

（参考文献）

・「不老橋」和歌浦を考える会

（写真提供）

・湯浅町